特　集
城南信用金庫
吉原　毅
名誉顧問に聞く

おかげさまで　創刊61周年
(公社)日本専門新聞協会加盟
速報は、キンタイFAX
解説は、Kintaiで!!
fax 03-3288-1160
e-mail info@kintai.biz

Kintai 金融タイムス

(昭和34年5月25日　第3種郵便物認可)　第1542号　2020年(令和2年)12月15日(火曜日)

(公社)日本専門新聞協会加盟 おかげさまで 創刊61周年
速報は、キンタイFAX 解説は、Kintaiで!
HP http://kintai.biz
E-mail info@kintai.biz

12月15日(火曜日)
発行所
金融タイムス社
東京都千代田区九段南3－7－9
〒102-0074　電話 03(3288)1121㈹
編集兼発行人・大塚一雄
郵便振替口座　00160-4-62520
発行日5日、15日、25日

令和2年は新型コロナ感染症に明け、そして暮れた年だった。2019年暮れに中国・武漢地方で発生したと言われるこの感染症は、またたく間に地球規模で蔓延し、世界の人々がその恐怖に怯え続けた1年であった。日本もそのコロナ禍の最中に、長期政権を誇ってきた安倍首相が病気退陣するというハプニングの年だったが、この百年に一度とも言われる国難ともいうべきコロナ禍新時代は、すべての面で一新されるものと思われる。

昭和20年の終戦後、世界の国々は自由主義・資本主義の名の下に競って国の繁栄を図ってきたが、これからは産業構造と人間生活のあらゆる面で、抜本的な見直しが余儀なくされる時代になると思われる。IT化が進む時代に加えて長期不況となれば、国民生活環境は益々困難が予想される。明治維新後、日本は関東大震災や第二次世界大戦等々幾多の試練に直面し、それをなんとか突破してきたが、その都度国民から最も信頼され頼りにされたのが相互扶助・共存共栄理念の協同組織による産業組合出身の庶民金融機関だった。

産業組合から改組発展した信用組合・信用金庫は一にも公益、二にも公益―のまさに苦しい時の唯一の庶民金融機関なのである。品川弥二郎、平田東助。そして加納久宜子爵等々明治時代の産業組合育ての親とされる大先輩の流れを受ける「ミスター信金」といわれた故・小原鐵五郎翁の生粋の愛弟子ともいわれている城南信金の、吉原　毅（つよし）名誉顧問に、率直な時局対談をお願いした。

なお同信金では川本恭治理事長の陣頭指揮のもと、全職員が全店にわたり、コロナ禍により営業不振に喘ぐ中小企業並びに地域市民への支援と救済策に、全力展開中である。

新型コロナ禍 大不況時代

相互扶助・共存共栄 信金こそ本格的出番

伝統と歴史ある協同組合論を説く

城南信金・吉原　毅名誉顧問に聞く

吉原　毅（よしわら　つよし）城南信用金庫名誉顧問

1955年東京都生まれ。1977年慶応義塾大学経済学部卒。同年城南信用金庫入職。1983年企画部配属、1992年理事・企画部長、1996年常務理事、2000年専務理事、2006年副理事長、2010年11月理事長就任。

任期を理事長・会長の通算で最長4年。定年を60歳とするなど、コーポレートガバナンスを目的とした異色の改革を断行。

2015年6月理事長を退任し相談役、2017年顧問、2020年名誉顧問に就任。しんきん成年後見サポート理事長、麻布学園理事長、日本社会連帯機構副理事長――等を務める。

一にも公益、二にも公益優先で困った時こそ支援・救済に全力

加納子爵、小原鐵五郎翁の思想を再認識

城南信金は、信金業界のルーツである

大塚主幹　昭和26年6月に信金法が公布施行されてから明年6月で満70周年を迎えるわけですが、城南信金さんは市街地信用組合時代から信用金庫になるまでに、そして現在の信金中央金庫の前身である全信連の設立などに、当時の代田朝義組合長や酒井熊次郎組合長さん達が大変なご苦労をなされました。

また昭和26年に信金法が公布施行されるまでには、「信用銀行法期成同盟」とか「信用金庫法反対期成同盟」などもありまして、信金法の制定までには、紆余曲折があって難産だったようです。

また当時は、戦後復興のための日銀の預託金配分問題など業界の業務推進のためには、ぜひとも業界独自の中央金融機関が必要ということで、そのために全信連が設立されたわけです。そして本部は、当時の城南信用組合の中にありました。

昭和38年5月には、全信連3代目の会長に小原鐵五郎城南信金理事長が全会一致で推薦されて就任。

さらに昭和41年3月には全信協の第8代会長に就任されて、名実共に信金業界の意思の統一と業務推進のために強力な指導体制ができあがりました。

小原会長は全信協会長就任間もなく、大蔵大臣の諮問機関である金融制度調査会の委員に選ばれました。そこで中小金融機関を見直す案として、いわゆる川口・末松二人の学者案に加えて大蔵官僚提出の「滝口試案」に遭遇したわけです。

この滝口試案が、「信用金庫を銀行化するもの」いわゆる「信金抹殺論」であったわけですが、小原会長はこの案に猛烈に反発。どうしてもこの法案を通すというのなら全国の信金さんに檄をとばし、霞が関の大蔵省を「ムシロ旗」で取り巻くーと反対したことは、業界関係者の語り草ともなっております。

城南信金さんは、平成時代初頭に役員交替のハプニングがありましたが、非常時にこそ信金は、中小企業や国民大衆の生活を守る日本唯一の協同組織による民間金融機関であることに、誇りと自信を持っておられます。

令和2年は百年に一度ともいわれる新型コロナ感染症に襲われ全国民が顔にマスクを掛けて困り果てているわけですが、このような時こそ世のため人のためを実践する協同組織による信金の出番だと思います。

城南信金創始者である加納久宜元子爵のルーツ並びに小原会長の生前のエピソードなどを含めまして、忌憚のないお話しをお伺いしたいと思います。

吉原名誉顧問にインタビューする本紙・大塚主幹（右）

「貸すも親切　貸さぬも親切」は、キンタイが最初に取り上げた語録

加納　久宜子爵

小原　鐵五郎
城南信金元会長

大塚　ところで小原会長の「貸すも親切　貸さぬも親切」という言葉が、昨今のテレビドラマの「半沢直樹」のなかに登場したそうですが。

吉原　出ましたね。何回も出ていました。あの言葉はキンタイさんが編集出版した「小原鐵五郎語録」の中で大塚社長さんが取り上げた言葉なんです。

小原会長は明治32年に生まれて、大正8年に城南信用組合に入職したんですが、そのときに小原青年18歳。大崎信用組合の立石組合長に見込まれて、入ったそうです。

貧しかったんですよ。貧しい生まれだったから貧しい人たちの気持ちがよく分かっていて、自分も小学校しか行けなかったから、後に小原白梅育英基金をつくった。常に貧しい人たちの味方だったのが小原会長なんですね。だから昭和31年に信用金庫のトップになる時は大変だったようです。

なぜかというと、昭和31年ごろには酒井熊次郎さんとか立石さんとか、みんな裕福で町長さんレベル。名主さんレベルなのです。名主さんレベルの人が、みんな合併した各信用組合のトップだったんです。ところが小原会長は貧しい農家のせがれでしょう。でも、優秀だというので専務にまで抜てきされたわけです。

大塚　しかし合併した信用組合の中でも実務家は小原さんだけだったようですが。

吉原　現場をやっていたので、何でも知ってる。だから何でもできるから専務まで生え抜きでなったんですけど、当時の雰囲気は小原にはトップなんか任せられない―と言われていたようなんですね。

私の母方の祖父は蒲田信用組合の組合長を務めていて、当時は合併して城南信用金庫にいたのですが、小原理事長就任に賛成したそうです。祖父も蒲田でやっぱりそんなに裕福じゃなかったし、蒲田町役場とか、それから蒲田の区議会議員なんかもやっていたのですが、どちらかというと努力家だったそうです。

大塚　当時の小原さんは、加納さんの存在は分かっていたんですか。

「一にも公益事業、二にも公益事業」この思想を小原さんが受け継いだ

吉原　城南信金には名門の家柄のいい人たちと、実力で頑張ってる人たちのグループがいて、実力派のグループは小原さんを支持したのです。それで小原さんがやがて僅差でトップになったようです。

身分が違うだろうといわれたんですけど、でも、それで小原さんは何としても自分がトップになって、貧しい人たちのために、この信用金庫はあるんだってことをやったのです。

これは加納久宜公も言っていたんですけど、「一にも公益事業、二にも公益事業、ただ公益事業に尽くせ」の思想なのですね。産業組合中央会の夜間勉強会があって、そこで小原会長もよく勉強していましたから、世のため人のためという、その教えをちゃんと受け継いだようです。

協同組合運動のルーツは、二宮尊徳先生の報徳社運動だった

吉原名誉顧問　そもそも協同組合運動である産業組合のルーツは、二宮尊徳先生の報徳社運動にあります。徳川幕府と一緒に当時荒廃していた日本の国を建て直そうということで、二宮尊徳先生はまず小田原藩の財政を建て直したり、貧しい農村を建て直ししたりしていたんですね。それが日本の協同組合運動の原点なのです。

明治維新で日本が文明開化したら、なんとヨーロッパではすでに協同組合運動をやっていたことに気が付いたのですね。1844年にイギリスのロバート・オーウェンという人が協同組合の会社をつくっていたのですよ。

ロバート・オーウェンは日本的な経営をやった人なんです。当時有名なマンチェスターの最大の紡績工場の経営者だったのです。その頃の経営者は働く人たちをいじめまくっていたんですね。みんな貧困にあえいでいたのに、なんとロバート・オーウェンは、働く人たちをもっと大切にしなければ駄目だということで、人を大切にする経営をやられた。

そのことに感激した働いてる人たちが自分たちで組織をつくろうということでつくったのが、1844年のロッチデール公正先駆者組合で、史上初の近代的協同組合といわれているんですよ。

それに基づいてイギリスでは、19世紀に協同組合法ができた。日本でも、1868年の明治維新後に、政府はヨーロッパに使節団を送ったんですが、視察団の団員だった品川弥二郎は、義理の弟の平田東助と一緒にプロイセンに行ったわけです。そこではすでに信用組合という組合があるんだということを知るんです。二人は勉強し、平田東助はなんと博士号まで取っている。

このシュルツェ式信用組合とライファイゼン式信用組合が、日本の信用金庫と農協の原型になったのです。

日本に帰ってきて、やっぱり貧しい国民を救うには、みんながそれぞれが自立できるように協同組合がなければ駄目だということで、ようやく1900年に産業組合法が通りました。

そもそもの城南信金のルーツは、加納久宜公であった

大塚　城南信金のルーツは入新井信用組合でしたね。組合長だった加納久宜公は、産業組合運動と発展に貢献されたそうですが。

吉原　入新井信用組合は、産業組合法ができた2年後の明治35年に加納久宜公がつくったんです。

加納公は、上総一宮藩の最後の藩主として明治維新を迎え、貴族院議員や鹿児島県知事などの要職を歴任していました。

東京近郊の庶民は「薩長の天子様より徳川の公方様」という江戸っ子意識が強かったらしく、加納公に親しみを覚えていたのと、当時は薩長藩閥が財閥と組んで利権政治を行い、貧富の差が拡大して庶民が苦しんでいたということも、組合設立につながったのだと思います。

明治38年には会頭を平田東助、副会頭を加納公とする大日本産業組合中央会が創設され、加納公は全国農事会と入新井信用組合の連名で全国の約1300の産業組合に呼びかけ、自らが議長となって第一回全国産業組合大会を開催いたしました。そして同年、大日本産業組合を設立し、全国の産業組合（今の信組・農協・生協）を指導したのです。

当時、新渡戸稲造とか宮沢賢治とか、そういう方々が産業組合運動に力を尽くしました。つまり理想社会をつくる運動だったわけです。

産業組合歌に、小原会長も大いに賛同

大塚　当時、西條八十先生が産業組合歌を作っているのです。

吉原　その証拠に、当時、1番は、「深山の奥の杣人も、磯に釣りする海女の子も、聴くや時代の曙の鐘、共存同栄と響くなり」で、3番には「時の嵐は荒ぶとも、誓いはかたき相互扶助、愛の鎖に世を巻きて、やがて築かん理想郷」とあります。

当時、小原会長はこのレコード持ってきて、君たち、毎週これを歌いなさいと言ったのです。私は企画部にいたのですが、こんな古めかしい歌は歌えないと思いました。しかし今にしてこの歌の価値がようやく分かりましたね。

協同組合の仲間でつくった「全信懇」というのがあるんですが、そこに小原会長はいつも参加していて、その集まりの時には必ずこの産業組合の歌をみんなで歌ったと言うんです。そういう戦前の人たちは、この産業組合というのは日本を貧困の道から救う、とても大切な運動だと思っていたのですよ。

大塚　小原会長は、最初から庶民金融の理念をはっきりと持っていたわけですね。

吉原　みんなが幸せに暮らせる中産階級になれるよう貧富の格差を是正して、みんなが中産階級として、安心して暮らせる世の中をつくることが理想社会なんだという、今でいうところのリベラル的な考え方だったんです。そのほうが経済発展もするし、それは正しかったんですね。大恐慌の後に成功したニューディール政策やケインズ政策ってみんなそうなんですよ。

2面に続く

高齢者の皆さんを幸せにしたい!
一般社団法人しんきん成年後見サポート
会長　堀口哲彦
理事長　吉原　毅
〒141-8710 東京都品川区西五反田7－2－3 城南信用金庫本店11階
電話 03－3493－8147
FAX 03－3492－2088

「よい仕事おこし」で日本を元気に!
日本労働者協同組合(ワーカーズコープ)連合会
理事長　古村伸宏
センター事業団
理事長　田中羊子
日本社会連帯機構
代表理事　永戸祐三
〒170-0013 東京都豊島区東池袋1－44－3 池袋ISPタマビル7階
電話 03－6907－8040(代表)

1面から続く

吉原　知っていましたね。だから、金融タイムスさんの本にも書いてあったと思うんですけど、昔、加納さんっていう人がいてね―みたいなことを書いてましたね。なんといっても、大日本産業組合中央会をつくった人だし、その夜間勉強会で自分も勉強したんですから、当然知っていたと思いますよ。明治の協同組合運動をやった第一人者はやっぱり品川弥二郎、平田東助。そして実際にリーダーとして活躍したのは、本当は加納久宜公なのですよ。

だけど謙虚な人だから自分のことは全然言ってないし、自分で借金をつくっては、庶民のためにに尽くしてきたような謙虚なお殿様なんです。しかし名君なんですよ。だから、絶対自分は表に出ないような人でしたね。

当時の大蔵省は、いつも信金を銀行にしたがっていた

大塚　信金業界に長年にわたり何回もかけられている行政の圧力の一つに、「株式会社銀行化論」がありますね。信金も、やっていることは銀行と全く同じ。特に規模が大きくなったところは銀行にしてしまえばよい―という大雑把な論議が金制でこれまで何度も出てきました。

吉原　小原会長が昔よく言ってました。お金は麻薬だって。融手とクレジットカードも麻薬だけど、お金そのものが麻薬なんだ。何でかというと、お金がなくなると人間、犯罪を犯したりするんだよねと。アメリカが犯罪多くなったのはなぜかというと、みんなお金に困っちゃったから、借金地獄。あれがいけないんだよね。だから定期積金を皆さんにお勧めして、ちゃんと安心して暮らせる世の中にしなさいと言っていた。「吉原君、金は銀よりも上、銀行に成り下がっては駄目だ」、なんていうことをいつも言っていたんですね。

大塚　いわゆる「小原語録」ですよね。

吉原　平成になってから八千代信用金庫が八千代銀行になった。あのときにみんな、幾つかの信金さんが浮足だった。大手の信用金庫の経営者の方々が集まって、第三地銀構想をつくろう―みたいなことやったことがあるのです。それは結局つぶれたんですけどね。

アメリカ側は、信金などは目の敵だったのです

吉原　ところで昭和26年に信金法をつくる時に、酒井熊次郎がGHQのヘンリーロビンソン中佐に呼ばれて、そんなものは認めない、銀行業務をやるなら株式会社になれと言われました。GHQが信用金庫法に反対したというのはなぜかというと、国際金融資本の言ってみればイギリスの植民地がアメリカなのです。結局はイギリスの富豪たちが、どこか金もうけするのに便利な植民地をつくろうということでつくったのが、アメリカだったのです。

今でいうところの経済特区みたいなもんですよ。従ってそのアメリカが株式会社以外の会社など認めたくないのは当たり前なのです。日本に協同組合なんかあると、株式会社の金もうけに差し障りがあるんじゃないかということで、つぶしたくてしょうがなかったのですね。

昭和26年の次は昭和40年の時にもつぶしにかかった。この協同組合というのは、〝目の上のたんこぶ〟だったのですよ。また平成6年ごろにも一回あったですよね。突然と して、信用金庫はガバナンスが悪いから株式会社にすべきだって議論をいきなり、大蔵省が出したんです。だから、信金抹殺論が時々〝ボッ〟と燃え上がるんですね。

やはりそのときには、表向きはいろんな学者が入ってきて、まず信用金庫はガバナンスが悪くてこんな古めかしい組織はつぶすべきだ、腐敗している、堕落してるって言うんですね。なぜだといったらトップ経営者が長すぎるって。自分の私利私欲のためにやってんじゃないかみたいな、そんな話をするのです。特に経営者が長いっていうのが目の敵なんです。

私は、それが本当に悔しくて悔しくてたまらなかった。

川本城南信金理事長（円内）と
11月に開催した「2020〝よい仕事おこし〟フェア」

今だから言えるクーデターの真相
当金庫も一時、道をはずれた時があった

大塚　ところで小原さんの失敗があるんですね。結果的に後継者づくりで失敗してしまったんですね。

吉原　当金庫も小原鐵五郎会長が逝去されたあと、本来の公益性を否定するような、自由主義経済風の新種預金などを突然売り出したりたりして、業界サイドから一時的にしろ、かなりの顰蹙を買うような事態がありました。

経営内部的には種々批判勢力もありましたが、なにしろ人事権を悪用して恐怖政治をする人の天下で、その時点ではどうすることもできなかったわけですね。しかし、今はあのような事態を深く反省し、業界の皆さまに相済まない気持ちで一杯です。いまは全金庫あげて原点回帰の姿勢で頑張っているわけです。

後継者づくりの失敗の原因の一つは、業界活動にほとんど専念されていた結果なのです。金庫に来るのが週に2回ぐらい、しかも金庫にいても半日ぐらい。あとは、ほとんど全信協、全信連で全国を回っていたわけです。いつも金庫の方は留守になってしまうのですよ。留守をあずかる役職員達は小原会長の経営理念とかお話を聞くなんてことは、ほとんどできなくなっていたんですよ。信金経営の理念に燃える信念のある役員さんは全然いなかった。

それはなぜかというと、役員にしても職員にしても本部にいて現場離れると、自己保身で精いっぱいになってしまうのです。加えて、トップの人に人事権を持たれると、その他の役職員はみんな自己保身でいっぱいになってしまうのですよ。この会社組織っていうのは怖いことに、どんな会社でも取締役なんて大体トップ経営者の奴隷になるんですよ、だから、私はそれを見てて、このやり方では絶対理念も何もなくて、自己保身の人間ばっかりになってしまうなと思ったのです。

真壁さんは、自由主義論者であった

吉原　ちょうど今から10年前の11月10日、ここでクーデターをやったんです。ちょうど今の時間、真壁さんと散々議論したのです、隣の部屋で。そのときに思ったのが、今の城南信用金庫のやり方は新自由主義、つまり自分さえよければという考え方で、優勝劣敗の原則です。真壁さんは、今は自由化時代でそれが原理原則だ―みたいなことを散々言っていた。そこで私はそれは違うんじゃないかなと思ったのですよ。

人を信じて、人を助ける、そういうみんなで話し合いで経営をするような、そういう経営をやってみせると言ったのです。そうしたら、「お前は甘い」と真壁さんに散々嘲笑されました。

大塚　あの頃地方の信金さんから、「大塚さん、あなた、ずっと小原さんを尊敬して、小原さんの本を作ったりしているけど、何で小原さんは自分の金庫であいう全然経営の考え方の違う人を後継者に選んだって」よく聞かれましたよ。

吉原　小原会長は金庫を留守にしすぎた。後継者として選んだんじゃなくて、要するに隙を突かれた。だから、人事というのは怖いんですよ。

大塚　その実態を皆さん知らないですよ。

吉原　本当は後継者じゃない、指名した人とは別な人が小原会長が急死した後に、突然自分が後継者として故人に指名を受けたと言い張って乗っ取ってしまった。証拠がないからどうしようもなかった。

大塚　小原さんとしては人事の問題については、最後の最後まで言わない主義だったんですよね。以前、全信連の役員人事で大失敗したことがあったんですよ。

吉原　それはよく言われました。だから、当金庫の人事は本当に秘密主義でした。

最高人事は、きちんと後継者を決めて、何かあったらこの人間に頼むと明確にしておく必要があると私は思いましたね。そして自分の考えだけではなく、皆んなの意見を聞いて相談して次は誰って決めないといけないと思いました。

クーデターの後、原点回帰を誓った
全国の信金さんには、本当にお世話になった

大塚　吉原さんが理事長になった時、なにを目指されたのですか。

吉原　私がクーデターやった時に、〝原点回帰〟ということを言ったのです。

信用金庫の原点回帰。王政復古みたいなものですよ。小原会長の考え方、それから、加納久宜公の考え方。つまり原点って大事だなと思ったわけです。そう考えてみると、ほかの信用金庫さんが一生懸命やってることに、はっと気が付いたのです。地方の信用金庫さんなんか特にそうですけども。だから、そういう所へ、これからは勉強に行くべきだと思ったのです。

東京都内、関西、それから中京地区の大手信用金庫さんのところにも頭を下げて、みんな勉強に行きました。

皆さん快く教えてくださった。ある信金では、「城南さん、お帰りなさい、ようやく正常になったね」と言われました。

それでその時に、みなさんが何やってるのかよく分かった。それは地方における地域経済活性化と同時に社会貢献を一生懸命やっているんだって。小原会長や加納久宜公がやはり一人だけ取り入って上になってしまう人っているじゃないですか。裏表ある人は平気で人の目をごまかしますから、だから、みんながいいと思う人をちゃんと選ばないと駄目だと思いましたね。

城南信金さん、お帰りなさいと言われた私の後の理事長達も、みんな感謝しています

大塚　かつては城南の小原会長を頼っていた信金さんが、今度は城南に頼られる立場になったということですか。

吉原　そうです。全国の諸先輩の方々の、脈々とした信用金庫精神というのを、いろいろ教えていただきました。そのときに皆さんに大変なご恩をいただいたので、そのご恩を返さなきゃいけないということで、「よい仕事おこしフェア」をやって、全国の信用金庫の皆さんに無料で出展していただいているわけです。

新体制になってから、全国の信用金庫の皆さまにはお世話になった。その前の22年間は大変ご迷惑を掛けた。そのおわびとお礼の意味もあって、城南が全国の信用金庫に少しでもお役に立つように頑張ろうということで始めたのが、「よい仕事おこし」なのです。

それを始めて、実際に全国各地を回って頑張ったのが今の川本理事長。それから、前の渡辺理事長、その前の守田理事長とか、そういう人たちがみんな全国回って勉強したり、いろんな人脈つくったんです。そういう流れの中で、今の川本理事長が全国に人脈があって、皆さまと親しくさせていただいてるわけです。

言ってたことは、要するに地域を活性化することだから、単にお金を貸したりとか預かったりしてるだけでは駄目なんだと気付きました。

協同組合は株式会社より新しくて先進的な考え方

大塚　信用金庫は営利を目的としない協同組織金融機関だからこそ、今回のコロナ禍で困っている中小企業や人々のために親身な対応ができたのではないかと思います。

吉原　協同組合は株式会社よりもっと新しくて先進的な考え方なんですよ。実は株式会社のほうが古くて結局、お金儲けはうまいけれども企業組織としては、はるかに欠陥だらけなんです。

協同組合運動という点でいうと、本当に業界には、立派な方々いっぱいいて、この絆というのを大事にして結束している。信金業界は本当に今、すごい力を発揮してるのです。それが今、新聞などでも地銀や銀行は信金を見習えと、そこまで言ってくれています。

やはりこれは全国の信用金庫の皆さんのお力。そこは何かというと、最後は、理念ですよね。利益も大事なんだけど、やはり地域に奉仕するのが大事だという、この理念で結局経営もよくなっている。

現場に行って、お客さまと一緒にいろんなことを考えて悩んで、突破口を考えていくということをやっているのが信金業界。この協同組合の理念というのは実はほかにもあって、農協や漁協、生活協同組合もある。今後そういう所との絆をつくるために、信金業界が中心となって連携協力体制をつくるべきだと思います。

協同組合タイプの企業が大同団結の時「労働者協同組合法」は画期的な法律

吉原　昔、明治33年の産業組合法成立の時はみんな大同団結したのです。信金も農協も生協もみな同じ産業組合の兄弟だったのです。その後もう一回、1945年には賀川豊彦先生が全国協同組合連盟というのをつくった。今、何をやらなければいけないのかといったら、農協、生協、労働協同組合、それから信用金庫、信用組合、こういった協同組合のタイプの企業が手を結ばないと、日本全体が大変なことになると思うんです。

なぜかというと、今日本は全部外国の大企業の支配下にあるのです。食料の安全性も、農業も漁業もあるいは軍事だって、全部牛耳られてる。こういうようなことで本当は独立国じゃないといわれているのですが、そこを変えていかなければならない。

それを変えられるのは何かといったら、協同組合企業しかないんです。株主が地元で、働いてる人も地元。株主も働いてる人もそして消費者も地元で地産地消でやっていけば、経済は成長するんですよ。日本のGDPの80％が国内需要なのですから、それをもっと高めていけば日本は元気になり経済的に安定するのです。

労働者協同組合法というのが今度できるのですよ。なんと自民党から共産党まで全会一致で、この12月4日に国会通るんです。議員立法で全党全会派が一致で、大きな法律が通るのは信用金庫法以来であり、前代未聞なんです。この労働者協同組合とは何かというと、働く人たちが自分で会社つくろうという話なのです。まさに協同組合の原点。

ILO（国際労働機関）でも、ものすごいミラクルな法律だって高く評価しています。何をやっていくかというと、協同組合の原点に立ち返ってやっていこうとしているのです。

この法律は、みんなで出資してみんなで経営してみんなで働くということです。地域の持続的な活力ある発展に資するという目的に沿った会社なのです。

実は私はワーカーズコープの副理事長もやってるんです。なぜかというと、実は「よい仕事おこし」という言葉はこちらの業界のスローガンからもらったのです。2012年に私はこの組織と知り合って、この考え方はとてもいいなと思ったので、「よい仕事おこし」という名前をいただいたのです。

これからは、こうした新しい協同組合企業を信用金庫が応援して、共に力を合わせて地域の活性化に役立てていくことが大切だと思いますね。

信金経営は世直し運動で、政治運動株式会社銀行とは本質的に異なる

吉原　私は会社というのは、もしかしたら政治組織なのではないかと思っているんです。みんな金もうけのためや生活のためにやってると思ってるでしょう。でも考えてみたらそうじゃないし、小原会長だって始めたのは世直しのためにやったわけで、つまり政治運動なんですよ。運動性というのが企業の本質であって、金もうけは二の次だったはずなのです。

大戦線を組んで、協同組合というのをこれからの日本の政治経済の中心に持っていくぐらいの気持ちがないと、日本の保守主義というのは動かないですよ。

真の保守というのは、大企業やアメリカの言うこと聞いているのではなくて、地元の人たちの幸せを考えることにあるわけです。だから先祖を敬って、子孫のことを考えるのが保守ですよね。その真の保守主義をつくるためには、やっぱり協同組合しかないのです。私は、株式会社は欧米の富豪が世界中からグローバルにお金を集めるためのキャッシュマシーンだと思っています。そして協同組合こそ「人類の歴史の正統な継承者」であると思っています。

川本理事長たちは今一生懸命やっています
城南のDNAを絶対守ろうとして…

大塚　全国の信金がネットワークを組むことで、実現できることを広げる可能性を示したのが、城南信金さんが事務局をされている「よい仕事おこしネットワーク」だと思いますが。

吉原　川本さんが今、一生懸命やっています。

加納久宜公から小原会長の考え方。川本理事長はこれは城南信金のDNAですーと、よく言っています。そういった考え方を全職員が共有してるんですと。

そのDNAは何かっていうと、困った人を助けるのが信用金庫の仕事。そして、そのためにはやっぱりこういうときこそ全力でお助けしなきゃいけない。金融面ではとにかく全力をもって融資をする。だけど、お金を出しても傷口にばんそうこう貼るようなもんで、本当の治療をするためには会社自体、商売自体を元気にさせなきゃいけない。元気になっていただくためには、よい仕事をおこしフェア。そしてよい仕事をおこしネットワーク、そしてよい仕事おこしプラザ、世のため、人のために、よい仕事をみんなでつくっていこう―ということで、全国の人たちとネットワークをつくってみんなで助け合って、仕事をどんどん増やしていきましょうと。みんな、お互いに協力しあって日本を明るく元気にしようというスローガンのもとに、やっていきましょうという話をしています。

しかも信用金庫だけじゃなくて、今は大学とか地方公共団体の方々とか、それから大企業の方々にも力を借りて、新しい発想のビジネスを起こしていこうと。これがやっぱりポイントかと思いますね。

日本は実は内需は8割ぐらいあるんです。日本は意外と内需依存型経済なんですね。だから、やる気になれば、この8割の需要を増やして行くことによって、国内で資金が環流するし、物も環流するんですね。最新の経済理論では、グローバル化、つまり外需依存型の開放経済にすればするほど、世界はデフレ不況になり、国内は失業や貧富の格差が拡大していくとされています。

だから、みんがやる気になれば、いろんな経済がこれから新しく起きてくる。今までは自由化規制緩和ということを言ってました。しかも今までの規制緩和は、どちらかというと外国企業など一部の人たちが得するような規制緩和でした。

そうでなくて、みんなで力を発揮する中で、必要なものは規制緩和していくし、そうでないものについてはまた新たな絆をつくっていくっていうことが、信用金庫の新しい、求めていることなんじゃないかと思うんですね。

川本理事長は全信協の広報委員長に業界から受入れられて、うれしい

大塚　川本理事長は、昨年全信協広報委員長に選ばれましたね。

吉原　川本理事長が広報委員会をやったり、今、業界で城南を仲間として認めて下さっていることが大変ありがたいです。やっぱりそうやって業界の方々が城南を受け入れてくださってるってこと自体は非常にうれしいことです。

当金庫は、理事は役員ですけど、理事を辞めても実は65歳まで顧問をやれるんです。理事は議会で言えば下院みたいなもので、上院が顧問なんです。もちろん下院のほうが力がありますが、上院はいろんな意見を諮問するという立場で、ちゃんと二院制になっている。それでちゃんと重厚さを保ってると思いますよ。

そうしたやり方で、若い新入職員さんやOBの方々、女性や障がいのある方など、幅広い意見を取り入れ、信用金庫業界の諸先輩のご指導をいただきながら、業界のため、日本のために少しでもお役に立っていければ嬉しく思いますね。